
Remote Sensing **～遠く離れていても～**

熾 梨緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Remote Sensing ～遠く離れていても～

【コード】

N59780

【作者名】

織 梨緒

【あらすじ】

警察の仕事へ戻ったセルト。そして、留学先の高校が終わり、大学進学を目前に、一時帰国する主人公。そんな二人の想いは遠く離れていても。

(前書き)

リモート・センシング。

それは対象を遠隔から観測する手段だ。

そう教えてくれたのはミルズさんで、

しばらく帰国する私には、必要なものだった。

「あつかんべーだ！」と言う私を、

くすりと笑うモニタの向こうの大切な人。

たとえ遠い国に離れていても、私は……。

久しぶりの帰国だった。大学進学の準備もあるから、何かと忙しいかったのだけど、友人達は、そんな私を気遣いながら、ささやかな送別会をしてくれた。

あっちの国に持っていけば喜ばれるよという料理の本だの、人気のお菓子だの、伝統的なおもちゃだの、びっくりするくらい、たくさんものをプレゼントしてもらった。

「これ、荷物、大丈夫かな？」

若干の苦笑いだけでも、それでも、みんなの好意を両手いっぱい抱えて、また、向こうで頑張るんだ、という明るい気持ちになれた。

あとは、パソコンを梱包するだけだ。

片づいた部屋の机の上にあるパソコンは、ネットに常時接続で立ち上がっている。「セルトと私の国じゃ、時差があるもんね・・・」と、うとうとしかけていた時、ネットフォンの呼び出し音が鳴った。私は、慌ててモニタに向かった。

「お・・・お帰りなさい、セルト。今日もお仕事遅くまでお疲れ様」

「おまえ、眠ってなかったのか？起こしたら悪いと思ったんだが・・・」

「ううん・・・待ってた」

自分の思いを素直に伝えるには、なんだか、照れてしまうからか、いつもの私の元気さと勢いはどこへやらだ。心の中で、やれやれと、そんな自分に苦笑したりもしてしまう。

でも……。

ネット初心者の私にも解りやすいように、ミルズさんがウェブ・カメラをつけていてくれたので、遠くても、セルトの表情が手を伸ばせばすぐそこにあるようで嬉しかった。

なのに！肝心のセルトは、最初の挨拶だけ正面を向いてくれたけれど、後は、少し目をそらすと、しばらく横顔のまま。私の、今日の出来事のおしゃべりを、黙って聞いているだけだった。

「あっかんべーだ！」

「今、何を言ったんだ？」

「ん？こつちの言葉で、『いいもんねっ！』とか、『ばーか！』っていう、子供のする表情と言葉よ」

基本、他人に「ばーか！」なんて言うことのない私なのだけど、ちよつと説明が悪かったかな、と、内心、心配になった。けれど、いくらなんでも、とても小さな子のすることだし。そう思うと、大らかで楽しい気分になった。

くすくす笑う私に、セルトは、案の定、相変わらずの冷静さで質問してきた。

「どづいづことだ？」

「だって・・・セルト、私の方に顔を向けてくれないんだもん・・・」

「な、それは・・・」

「それは？」

「・・・だろ」

しぶしぶそうだったけれども、それがセルトの照れかくしなのだろう。お酒を呑んだ訳でもないのは、まだ着替えも済んでない格好が映るモニタの様子からわかる。なのに、セルトの頬は少し赤く染まっていた。

私は、くすつと笑うと、「さっきの表情見た？」と訊いた。すると、「いや」と言うので、改めて、思いつきり、正面を向いたセルトに、あっかんべーをしてみせた。

「なんだ、その顔」

セルトは、一瞬、あっけにとられたて、首をふって、「あーあ」と両手をあげてみせたけれど、すぐに私の方を向いて、くすりと笑った。彼が笑うのは珍しい。

私は、なんだか、ほっとした。

「セルト、いいね」

「何が？」

「ううん、なんでもない」

それから私達は、画面にお互いの手を置いて合わせると、お休み、そういって、カメラを落とした。

「まだ、声繋がってるか？」

「うん、まだセルトの声、聞こえてるよ」

「お前、ホントに子供だな」

「当然じゃない！」

大人の女性ではない、というのは、背伸びしても届かないから悔しいけれど、仕方がない。私は等身大でいいのだと思っている。だから、セルトは今更何を言うんだか、と、思わず声を殺して笑うと、セルトは、聞こえるか聞こえないか小さな声で、「愛してる」「そうつぶやいた。

「え？」

今の私には、身に余る、名誉な言葉だ。私の国では、家族の間でも「愛してる」なんて言わない。そういう背景もあってか、セルトの言葉に気恥ずかしくもなったけれど、母国語じゃない、だからこそ素直になれるような感覚もあって、心の中で、「私も」と答えていた。尤も、セルトは、私がうまく聴き取れなかったと思ったみたいだった。

「なに？」

「いや、何でもない。明日も朝早いから、寝るぞ。風邪なんかひくなよ。お休み」

「お休みなさい。いい夢を見てね」

ヘッドセットを置くと、私は、あと数日で、また、懐かしいセルトに会えるのだと、胸がきゅっと締めつけられるような思いにとらわれていた。

「セルトも警察官の仕事、頑張ってるんだし、私も、大学で頑張らなくちゃね」

そして、心の中で、もう一度セルトにお休みを言って、夢の中で、銀色の髪のかかる額にそっとキスをした。

(後書き)

初めて二次創作作品(1.5次かもしれないませんが)を投稿します。
スピンアウトとまではいかなかったも、ストーリーで肉づけしていく
と、キャラクターが立体化してきて、楽しいものですね。

ゲームのEND後、セルトが特殊イベント：後日談で、セルトが主
人公の帰国を気にしていたので、ちょっと安心させたくまりました
(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5978o/>

Remote Sensing ~ 遠く離れていても ~

2010年12月18日18時32分発行